

The Peterborough Chronicle における 前置詞格について

岸 田 隆 之

1. 1. *The Peterborough Chronicle* (以下 *PChron*) の First Continuation (1122-1131) および Second Continuation (1132-1154) を資料として、名詞の格水平化を調査するのが本論の目的である¹⁾。*PChron* は中英語としては最古の East Midland 方言で書かれた年代記である。

名詞の格水平化についても、方言差が知られている。一般に、南部は保守的で、北部は進歩的である。例えば、Kentish 方言の *Ayenbite of Inwyrt* は 1340 年に書かれたにもかかわらず、loss of final-*e* は一般化されていない。すなわち、無語尾と格形は少なくないが、歴史的な有標と格形が主要形である²⁾。しかし、スコットランドおよび北部方言ではすでに 13 世紀中葉までに final-*e* は発音されなくなったとされる³⁾。South-Eastern 方言色の濃い *The Owl and the Nightingale* (C1250 Cotton Caligula AIX) についても保守性が顕著である。すなわち、対与格融合の証拠である前置詞の後での無語尾と格および *s*-plural は少なく、しかも類推による *a*-stem noun の *s*-plural は他類へ全く波及していない⁴⁾。また、南部とともに、西部の保守性も指摘されているが、South-West Midland 方言の *Lazamon's Brut* の C-text (a1225 Cotton Caligula AIX) でも同様の保守性がみられる⁵⁾。*PChron* (1122-1154) は North-East Midland 方言に属し、こうした南部・西部のテキストより少なくとも屈折の面でかなり進歩的な傾向をもつと言われる⁶⁾。

1.2. Cecily Clark によれば、*PChron* の First Continuation では、名詞の与格単数形は前置詞の後で歴史的形態を保持する傾向もみられるものの、無変化形の方がむしろ一般的であった。また、屈折形は単音節語に多くみられるという⁷⁾。Second Continuation では、さらに屈折の単純化が進み、属格だけが形態的に区別されるという近代英語の段階にまで至った⁸⁾。

なお、以上の格融合の進展の違いは三人称代名詞においても確認できる。Second Continuation では三人称代名詞は対格機能であってもすべて与格形のみが現れるが、First Continuation では男性代名詞 *hine* がまだかなり残存する保守的傾向もみられる⁹⁾。

1.3. 与格指標の final-*e* については、母音連接 (hiatus) を避けるために母音または *h* の前で削除される現象が初期中英語で認められている¹⁰⁾。そのため、無語尾与格形の発生が対与格融合という形態的レベルの現象か、音韻的に条件づけられたものか区別が困難であるという問題が生じる。C. Clark が指摘しているように、*PChron* では長音節 *ō-stem*, *i-stem* の女性名詞について、主格 (単数) の *ø-ending* が斜格形に及ぶのが通常だが、逆に斜格形の *e-ending* がすべての格に共通して現れる場合もある。後者では final-*e* は必ずしも歴史的与格を直接的に反映する語尾とは言えない。また、*i-stem* の対格単数に *ø-ending* が現れる場合、すでに late Mercian で *ō-stem* noun との類推で *e-ending* が対格形に侵入していることから、*PChron* の *ø-ending* は OE の本来の屈折形を反映するものとは言い難く、対与格融合によるものと C. Clark は考える¹¹⁾。いずれにしても、与格 (斜格) 指標としての final-*e* の機能が弱まり、不安定な存在であったことは確かであろう。

1.4. *PChron* では OF 起源の地名が多くみられる。OF では名詞は主格と斜格が区別されるが、多くの場合 (imparisyllabique を除く) 主格に *-e* が付かなければ斜格には *-e* はみられない¹²⁾。したがって、into *Normandie* (1123/76), to *Clunie* (1132/3) における final-*e* は斜格表示機能をもつと考え

られる(主格形は *Normandi(g)*, *Cluni(g)*)。だが, *France*, *Romare*, *Sicilie* では主格と斜格の区別はできない。個有名詞は人名・地名, 本来語・外来語を問わず *PChron* では無変化形が多い(of Sancte *Ædmund* 1123/52), of Sancte *David* 1130/7)¹³⁾。借入語の final-*e* は, 基本形が-*e* で終らなければ, 斜格表示機能をもつ post-prepositional case の指標としうが, 厳密には与格機能をもつとは言い切れないであろう。しかし, すでに述べたように, 前置詞の後でも無変化形が一般的である(of *Angeow* 1123/3, of *Mellant* 1124/5)。

2.1. *PChron* における対与格融合の証拠を, OE で与格を支配した前置詞の目的語として現れる (1) 強変化男性・中性名詞の無変化形 (uninflected form), (2) OE 与格複数形語尾 -*um* に代る *s*-plural, $\emptyset$ -plural, mutation plural (*men*) に主として求めることになる。強変化中性名詞や女性名詞の類推による *s*-plural は対与格融合の発達の有力な指標であろう。この *s*-plural はその語の既存のいかなる格形態にも由来しない。強力な屈折型の類推作用により, *a*-stem noun の *s*-plural が他類の名詞の与格機能に用いられたものである。

ただし, 単数形については, hiatus の音声環境にある場合を除いた無語尾与格形だけをまず対与格融合によるものとみなし, hiatus position のものについては屈折形と無変化形の分布状態により格融合によるかどうか判断する。

OF 起源の語の扱いについては, (1.4.) でふれたように, 子音屈折の語の final-*e* を斜格表示機能をもつものとし, final-*e* のない形を無変化形として扱う。

2.2. OE で与格を支配した前置詞のうち *PChron* に現れるのは *æfter*, *among*, *be*, *fram*, *into*, *mid*, *of*, *to*, *toforen*, *togænes*, *wiðinnon* である。まず, First Continuation における単数無語尾与格の例を示す¹⁴⁾。なお, hiatus position の例は星印 * を付す。

a) Masculine *a*-stem noun.

æfter Palmes *Sunendæi* (*1122/9)¹⁵⁾, æfter his *dæi* (1127/6), æfter Sancte Iohannis *messedæi* (1131/19), æfter þone *eorl* (1128/2), æfter *heruest* (1126/2), æfter his *pallium* (*1123/50); be þes kynges *ræd* (*1129/7); fram þone *ærceþiscop* (1129/27, 1130/2), fram se *biscop* (*1123/47¹, *47², 48, 49¹, 49²), fram þone *biscop* (1126/13), fram his an *castel* (1124/5), fram [þone] *kyng* (1123/38), fram anne *swein* (*1128/4), fram þa *undern* *dæies* (1122/15); mid be *cyng* (1127/55), mid þone *kyng* (*1129/4, *1131/14); of se *eorl* (*1127/11), of *hungor* (1124/53), of his *utgang* (1127/73); to *biscop* (1123/47, 1129/27), to his an oðer *castel* (1124/6), to ðe *Fridæg* (1129/15), to Midsummer *Dæi* (1131/18), to *erceþiscop* (*1123/22, *24), to þam *kyng* (1123/9), to þone *kyng* (*1123/23, *1125/14), to ðone *kyng* (*1128/18), to *Papedom* (1124/41); toforen se *kyng* (1123/34), toforen *heruest* (*1131/12); togænes . . . here *regol* (1123/27).

b) Neuter *a*-stem noun.

æfter þe *Romescott* (1123/40); mid here *micele fals* (1125/12); of *Engleland* (1127/20, *35, *1129/35), of his *hors* (*1123/10), of ðone *Romescott* (*1127/30), of *Eoferwic* (1123/54), of *Eferwic* (*1125/29), of *Noruuic* (1130/6); to *Engleland* (*1124/15, *1129/1, *5, 1131/12), to his agen *land* (1129/3), to his *gewitenement* (*1123/16); toforen Sancte Marie *wefod* (*1123/13); togeanes *riht* (1123/41, *1127/25).

c) Feminine *ō*-stem noun.

be þis *half* (1129/35).¹⁶⁾

d) Athematic noun.

of cherchades *man* (1123/23).

e) Proper names.¹⁷⁾

i) Personal names.

of Sancte *Ædmund* (*1123/52), of Sancte *Alban* (1125/30), of Sancte *Dauid*

(*1130/7), of *Hugo* (1123/84), of *Waleram* (1123/83).

ii) Place names.

fram *Burch* (*1131/13), fram *Ierusalem* (1128/17); into *Clunni* (*1130/19, *1131/29), into *Normandi* (1130/12); of *Burch* (*1125/37, *1127/23, 1128/13, 1130/18, 1131/35, *39), of *Burhc* (1127/49), of *Angeow* (1123/3, *1124/3, *22, *1126/11, 1127/9, 18, 52), of *Anieli* (*1123/40), of *Angeli* (*1127/24, 37, *1130/13, *1131/16), of *Clunni* (*1127/30, 43, *1129/31, 1130/15, 21, 1131/15, 31, *35), of *Mellant* (*1123/80, 1124/5), of *Mundford* (*1123/80, *1124/8, *11, 14), of *Normandi* (1124/20, 25, 1125/2, *1127/16, *51, *1130/8), of *Besencum* (*1127/38, 43), of *Curboil* (1123/32), of *Euereus* (*1130/7), of *Luuein* (1123/69), of *Sæis* (1130/8); to *Burch* (1127/55, *1130/13, 17), to *Ierusalem* (1128/22, *23), to *Normandi* (*1127/7, *1131/14), to *Peitou* (1128/10).

2.3. 次に, First Continuation で有標与格とみなしうる例を示す。

a) Masculine *a-/u-*stem noun.

fram þa selua tune (1127/68); to his *ærde* (1130/21), to *Walingeforde* (1126/7), to *Stanforde* (*1127/68), to *Gode* (1127/14), to þe *heouene* (1122/22), to þone *kinge* (1124/12);

b) Neuter *a-*stem noun.

æfter *rihte* (*1123/43); mid micel *rihte* (1125/10), mid *rihte* (1127/39), mid *unrihte* (*1124/25, 1127/40), mid micel *unrihte* (1124/47), mid ealle *unrihte* (*1124/49), mid *unsæhte* (1123/37), mid *wrange* (*1124/24); of *lande* (1123/67), of *Scotlande* (*1124/36, 1126/9), of *Sexlande* (*1127/7, *1129/34), of an *mynstre* (1123/33), of Sancte Iohannis *mynstre* (*1123/40), of þe *mynstre* (*1123/61), of þa *mynstre* (1131/24¹, 24²), of Sancte Iohannis *minstre* (*1127/37), of þe *Temple* (1128/17); to *biworde* (1130/19), to *Englelande* (*1125/2, 1128/20,

1130/15), to his *inne* (*1123/11), to *ðise lande* (*1125/13), to *þis lande* (1126/2), to *lande* (*1126/10), to Sancte Berhtines *minstre* (*1128/5), to his agen *minstre/mynstre* (1128/10, *1131/18), to *wife* (*1124/21, 1126/5, *1127/17, *21), to *þam wolcne* (*1122/20), to *Wudestoke* (*1123/4); tofor *þone weofede* (*1127/15); togeanes *rihte* (1123/61).

c) Feminine *u*-stem noun.

to *hande* (1127/6).

d) Athematic feminine noun.

to *þa swarte nihte* (1122/16); of *Cantwarbyrig* (1122/17, *1123/4, *53, 56, *57, *1125/16, *28, *1129/19), of *Cantwarabyri* (1129/28, 1130/1), of *Gleastingbyrig* (*1123/52), of *Glastringbyri* (*1129/26), of *Seresbyrig* (*1123/6, *25), of *Særesbyrig* (1123/30, 44, 1125/7), of *Searesbyrig* (1123/49, 73, 78), of *Særesbyri* (*1126/13, 1130/5); to *Cantwarabyrig* (1123/19, *45, *1125/17).

e) Place names.

into *Normandie* (*1123/76); of *Dunholme* (*1128/8), of *Peitowe* (1127/23, 36), of *Lundene* (*1123/47, 1130/4), to *Brigge* (*1126/6), to *Lundene* (*1129/12).

2.4. 母音連接を避けるために final-*e* が削除される傾向は *PChron* の First Continuation ではとくに認められない。表Ⅰによれば、男性・中性 *a*-語幹名詞について、無語尾形がhiatus positionに多く現れるとは言えない。むしろ、non-hiatus position に無語尾形が若干多く現れる。有標与格形について、(b)中性 *a*-stem 名詞および(e)個有名詞で、むしろ hiatus position にやや多く現れる(表Ⅱ)。もし hiatus position の影響があるとすれば、有標与格形は hiatus position で少ないはずである。ただし、男性 *a*-語幹名詞の有標与格形だけが他の類の名詞とは逆の分布を示している——(c)は用例数が少なく、(d)は母音変異を示す与格形であることから、この場合は対象外である。

Distribution of the Uninflected Form in Hiatus/Non-Hiatus Positions (Table I)

Classes Positions \	a	b	c	d	e (i)	e (ii)	Total
Non-Hiatus	26	8	1	1	3	29	68
Hiatus	14	11			2	29	56
Total	40	19	1	1	5	58	124

Distribution of the Marked Form in Hiatus/Non-Hiatus Positions (Table II)

Classes Positions \	a	b	c	d	e	Total
Non-Hiatus	6	18	1	13	3	41
Hiatus	1	22		13	5	41
Total	7	40	1	26	8	82

2.5. First Continuationでは概して有標与格形よりも無変化形が与格機能を担っている（無変化形 124 例：与格形 82 例）。例えば、男性 *a-* 語幹名詞について、無変化形 *king* の 9 例に対して変化形 *kinge* は 1 例だけである。同様に、中性 *a-* 語幹名詞では、無変化形 *Engleland* が 7 例、変化形 *Englelande* が 3 例である。地名では、*Normandi* の 9 例に対し変化形 *Normandie* が 1 例、*Clunni* の 10 例に対し *Clunnie* が 1 例だけである。しかし、逆の分布を示す語もある。*mynster* (neut. *a*-stem)の無変化形は全く現れず、変化形 *mynstre* だけが 9 例認められる。同様に、*Cantwaraburh* (fem. athematic) は全くみられず、与格形 *Cantwarbyrig* が 13 例認められる。C. Clark は単音節語に与格語尾が多く現れる傾向があるとしているが¹⁸⁾、それは *riht* (2:4), *land* (1:4), *wif* (0:4) に当てはまる。だが、*king* (9:1) はこれに逆行している。

むしろ、ここでは、*riht*, *-land*, *wif* に代表される中性名詞での与格形の優位（無変化形 19 例に対し与格形 41 例）と、*king* や *dæi* に代表される

男性名詞や地名での無変化形の優位に注目したい（40 例対 7 例，58 例対 8 例）。地名や athematic noun を除いて，男性・中性 α -stem 名詞だけについて格形態の分布を示す（表 III）。中性名詞の保守性と男性名詞の近代性は否定しにくいように思われる。

（Table III）

	Uninflected		Inflected	
	Masc.	Neut.	Masc.	Neut.
after	6(4)	1(1)		1(1)
be	1(1)			
fram	12(6)		1(1)	
mid	3(1)	1(1)		8(4)
of	3(3)	8(4)		12(3)
to	12(6)	6(2)	6(4)	17(5)
toforen	2(2)	1(1)		1(1)
togænes	1(1)	2(1)		1(1)
Total	40(24)	19(10)	7(5)	40(15)

注：（ ）内の数字は語数を示す。

2.6. 表 IV は格形態の不明な例を含めて，前置詞ごとに単数での格形態の分布を示したものである。final-*e*は与格表示機能をもつ場合と，格弁別機能をもたない場合があり，後者を代表するのが母音屈折の語である。*of* の 不明形 43 例のうち，28 例は地名だが，これらは母音で終る語形であるために格の弁別はできない——*France, Creme, Romare, Rome*（以上 OF）；*Bathe, Lincolne*。

Distribution of the Forms in the Singular after Preps.

(Table IV)

Forms Preps.	Uninflected	Inflected	Ambiguous	Total
after	7	1	7	15
amang			1	1
be	2		6	8
fram	14	1	2	17
into	3	1	2	6
mid	4	8	14	26
of	62	39	43	144
to	26	30	16	72
toforen	3	1	2	6
togænes	3	1	1	5
Total	124 (41.3%)	82 (27.3%)	94 (31.3%)	300

他に，*ō*-語幹名詞は，長・短の音節のちがいにかかわらず，対格形が母音で終るので，屈折形を対格とも与格とも区別できない(OE *giefe* (n/a/d/g), *lære* (a/d/g))。弱変化名詞では *n* の脱落もあって，母音 *e* が単数のすべての格に共通して現れる。94例の 不明形 の大部分はこうした類の名詞である。*-messe* (f.w.), *cyrce* (f.w.), *læfe* ‘permission’ (f.*ō*-stem), *-cestre* (f.*ō*-stem), *pape* (m.w.), *sune* ‘son’ (n.*u*-stem), *-rice* (n.*ja*-stem), *wurðscipe* (m.*i*-stem)などである。*PChron*では，これらの語が対与格融合に巻き込まれる可能性は低い——女性 *ō*-語幹名詞のうち，対与格融合を示すのは *half* ‘side’ (OE *healf*)だけである。*half* は OE で対格，属格，与格とも *final-e* で終るが，ここでは主格形 $\emptyset$ -form が歴史的与格形に取って代った。

2.7. 複数における対与格融合の例を示す。

a) Masc. s-plural.

mid . . . *abbotes* (1127/24), mid *ærcebishops* (1125/24), mid *leodbishops* (1125/24); of ealla þa *casteles* (1124/9), of here *stanes* (1124/46), of *Wales* (1123/49, *Wealh* の pl.); to hise *casteles* (1124/17), to fewer *scillingas* (1124/30), to six *scillingas* (1124/28, 29); togeanes *muneces* (1123/27), togeanes þa *muneces* (1123/61).

b) Mutation plural.

(i) Masc. fram his *cinnesmen* (1129/34); of þa ricceste *men* (1129/31), of ealle gode *men* (1128/21).

(ii) Fem. wiðinnon þa twelf *niht* (1124/10)

c) Analogical plural (Neut.).

mid strange *geoldes* (1124/52), mid strange *motes* (1124/52), of ealle Godes *rihtes* (1129/13), of earcedæcnes *wifes* (1129/15), of preostes *wifes* (1129/16); to . . . *abbotrices* (1125/20), to ealle þa *biscoprices* (1125/20).

d) OF s-plural.

of *Flandres* (1127/13, 22, 1128/3), of *Seintes* (1127/41).

First Continuationにおける前置詞格の複数形はほぼ近代英語の水準にまで達している。すなわち、有標与格形は from his agene manne 1127/15 における *manne* (OE *mannum*) だけで、格形態不明の4例(すべて弱変化名詞)を除けば、すべて対与格融合によって主・対格形に統一されている。強変化中性名詞がすべて類推による s-plural 形をとっていて、歴史的な $\emptyset$ -plural を保持していないのも注目される(表 V)。ただし、前置詞 on は on næt 7 on swin 1131/6 で歴史的な中性対格形を保っている。これらの語は近代英語でも単・複同形である。

Distribution of N/A Plural Forms after Preps.

(TableV)

s-plural (Masc.)	Mutation Plural	Analogical Plural (Neut.)	OF s-plural	Total
12 (8)	4 (2)	7 (6)	4 (2)	27 (18)

注：() 内の数字は語数を示す。

不明形 の 4 例をあげる。

æfter *Æsterne* (1130/13), to *Eastren* (1127/73), toforen *Eastren* (1131/13), of here *ægon* (1124/46)

Eastre ‘Easter’ は弱変化女性名詞で、通常は複数形が用いられる¹⁹⁾。*ægon* は OE neut, *eage* ‘eye’ の弱変化複数形である。

First Continuation では、母音連接を避けるための final-*e* の削除を積極的に認める証拠がみられないことから、単数での対与格融合がかなり進展していることになる（ただし、強変化中性名詞では保守的傾向が認められる）。他方では、複数については有標と格形が 1 例にすぎず、対与格融合の発達はほぼ近代英語の発達水準にまで達し、単数での発達をはるかにしのいでいるのが注目される。

3.1. 以下、Second Continuation について同様の調査を行い、First Continuation での調査結果と比較する。まず、単数無語尾と格の例を示す。

a) Masculine *a-/u*-stem noun.

after þe *ærcbiscope* (1135/16), æfter his *dæi* (1140/69), after Sancte Andreas *massedæi* (*1135/17), after Rodbert *eorl* (*1140/14); fra þe *king* (1140/51, *63); into *Oxenford* (*1140/46); mid *hungær* (1137/34), mid te *king* (1140/25, *43), mid *suicdom* (1132/7); of *hungær* (1137/43), of þe *king* (1140/53, *1154/11), of þe tur (1140/49); to *abbot* (*1154/15), to an *beom* (*1137/31), to þe *eorl* (*1140/51), to þe iunge *eorl* (*1140/63), to þe *king* (1132/2, *1154/14), to *king* (1154/6), to an *tun* (*1137/51), to *Walingford* (1140/50).

b) Neut. *a*-stem noun.

after *gold* (*1137/19), efter . . . *syluer* (*1137/20); bi the *hebed* (*1137/23); into *Engleland* (*1140/65); mid micel *swinc* (*1137/59); of þe *land* (1137/16), of *Scotland* (1135/21, 1138/1), of *Noruuic* (1137/77); to *Engleland* (*1135/10, 14, 1137/6, *1140/58, 1154/5), to þis *land* (1132/1, 1138/86).

c) Feminine *i*-stem noun.

mid ormete *færd*²⁰⁾ (1138/86), mid micel *ferd/færd* (*1140/15, *65), mid micel mare *ferd* (*1140/66).

d) Proper names.

i) Place names.

of *Albamar* (1138/3), of *Angæu* (1140/51, 61), of *Burch* (1132/2, 10, 1154/8), of *Normandi* (1140/50), of Sancte *Neod* (1132/11); to *Normandi* (*1137/2).

ii) Personal names.

after *Rodbert* (*1140/14); of *Hugo* (*1137/70), of *Willelm* (1137/69).

e) OF

mid micel *processiun* (*1154/17); of *prisun* (1140/33); to þe *hærness*²¹⁾ (1137/24).

3.2. Second Continuation における有標与格形とみなしうる例を示す。

a) Masc. *a*-/*u*-stem noun.

to *kinge* (*1135/16), to *Oxenforde* (1154/13).

b) Neut. *a*-stem noun.

be gode *rihte* (1140/56); into the *minstre* (1132/12), into þe neuuæ *mynstre* (1137/62), into an *minstre* (1140/32), of *lande* (1132/10, 1137/44); to *wife* (1140/55), to *wiue* (*1140/64).

c) Athematic noun (Fem.).

of *Cantwarbyri* (1140/7), of *Seresbyri* (1132/5, 1137/7).

d) Place names.

of *Aldewingale* (*1137/71); to *Chunnie* (1132/3), to *Lundene* (*1135/15, *1140/21).

3.3. Second Continuationでも母音接続の影響を無変化形について認めることはできない。もしその影響があるとすれば、母音接続の音声環境に現れる無変化形が多いはずであるが、表 VI によれば無変化形はむしろ非接続環境にやや多く現れる。final-*e* を保持する形については、(b) Neut. *a*-stem noun でその影響が一見してありそうに思われるが、他の(a) (d)ではその影響は認めがたい。したがって、(b)の数字をそのまま有意差を示すものとは考えにくい(表 VII)。以上のことから、First Continuationと同様に、母音接続を避けるためにfinal-*e*を削除する明確な傾向を認めるのは困難のように思われる。なお、表 VII の(c)は母音変異によって与格を示す類(*burg* × *byrig*)なので、final-*e* が添加されることがない。母音接続との関連では対象外である。

Distribution of the Uninflected Form in Hiatus/Non-Hiatus Positions (Table VI)

Classes Positions	a	b	c	d (i)	d (ii)	e	Total
Non-Hiatus	12	9	1	8	2	1	33
Hiatus	12	7	3	1	1	2	26
Total	24	16	4	9	3	3	59

Distribution of the Marked Form in Hiatus/Non-Hiatus Positions (Table VII)

Classes Positions	a	b	c	d	Total
Non-Hiatus	1	7	3	1	12
Hiatus	1	1	0	3	5
Total	2	8	3	4	17

3.4. 表 VIII は強変化男性・中性名詞に限り、無変化形と与格表示の final-*e* をもつ形の分布を示したものである。First Continuation で認められた男性名詞の近代性は Second Continuation でも明らかである。First Continuation で保守的傾向の強い中性名詞については、Second Continuation でも男性名詞よりは保守的である。ただし、全体として First Continuation よりも、さらに対与格融合が一段と進んでいる (無変化形 59 例: 変化形 17 例)。とくに、男性名詞での対与格融合はほぼ完結期に入っている。中性名詞でも発達は著しい。たとえば、First Continuation では中性名詞 (-) *land* の無変化形 8 例に対し屈折形 (-) *lande* は 11 例であるが、Second Continuation では (-) *land* は 10 例、(-) *lande* は 2 例にすぎない。すなわち、Second Continuation で中性名詞の無変化形が変化形よりもかなり多く現れるのが First Continuation での状況と対照的であると言える。

(Table VIII)

	Uninflected		Inflected	
	Masc.	Neut.	Masc.	Neut.
æfter	4(4)	2(2)		
be		1(1)		1(1)
fra	2(1)			
into	1(1)	1(1)		3(1)
mid	4(3)	1(1)		
of	4(3)	4(3)		2(1)
to	9(6)	7(2)	2(2)	2(1)
Total	24(18)	16(10)	2(2)	8(4)

注: () 内の数字は語数を示す。

ただし、名詞によっては屈折形だけが残存するものもある——*mynstre*, *-byri*。C. Clark は歴史的与格形 *mynstre* が単数のすべての格に共通する形

となった可能性を、また、慣用句で与格形が残るとも指摘している²²⁾ — *to wife*。

3.5. 不明形 は単数の 30.3% を占め、First Continuation での割合と同様である (表 IV, IX)。大部分は母音で終る弱変化名詞および *ja*-stem, *i*-stem, *ō*-stem noun である — *Pape* (m.w.), *smoke* (m.w.), *strengthe* (f.w.), *-wican* ‘office’ (f.w.), *-cester* (f.o-stem), *forewearde* (f.jo-stem), *Rome* (< OE *Rom*(f) & OF *Rome*), *-stowe* (f.wō-stem), *-rice* (n.ja-stem), *wurtscipe* (m.i-stem), *geinge* ‘troop’ (n.)。OF 起源の名詞として *France*, *Walteruile* がある。特殊な例は OE *Lindcylene* の短縮形 *Lincol* が 2 例みられる。なお、属格形が *be* の目的語となる 2 例も 不明形 の中に含めたことを付け加えておく — *be nihtes 7 be dæies* (1137/18)。前置詞 *be* は pleonastic insertion との指摘がある。²³⁾

Distribution of the Forms in the Singular after Preps.

(Table IX)

Forms Preps.	Uninflected	Inflected	Ambiguous	Total
æfter	7			7
be	1	1	2	4
fra	2		1	3
into	2	3		5
mid	10		9	19
of	19	6	13	38
to	18	7	8	33
Total	59 (54.1%)	17 (15.6%)	33 (30.3%)	109

3. 6. 複数における対与格融合の例を示す。

- a) Masc. s-plural.
 after þe *muneces* (1132/4); mid *deoules* (m/n. 1137/17), mid *rapes* (1140/49);
 of *castles* (1137/15), of þe *castles* (1137/15).
- b) Mutation plural (Masc.)
 bi the *fet* (1137/21); mid . . . yuele *men* (1137/17), mid *fæu men* (1138/4);
 of alle gode *men* (1154/12).
- c) Analogical plural.
 bi the *pumbes* (OE *puma* m.w. 1137/22); mid *castelweorces* (n. 1137/16),
 mid *suilce dædes* (f. 1137/55); of þe *landes* (n. 1137/66), of alle þe *landes*
 (1137/66).

Second Continuation では複数形はすべて s-plural もしくは mutation plural に統一されている。First Continuation で若干残存していた与格形および不明形 は全くみられず、近代英語と同じ水準にまで対与格融合が達している。また、類推による s-plural は中性名詞だけでなく女性 *i*-stem 名詞 (*dæd*) や男性弱変化名詞 (OE *pūma*) にも及んでいる (表 X)。

Distribution of N/A Plural Forms after Preps.

(Table X)

S-plural (Masc.)	Mutation Plural (Masc.)	Analogical Plural	Total
5 (4)	4 (2)	5 (4)	14 (10)

注 : () 内の数字は語数を示す。

4. 1. 与格支配の前置詞の目的語に調査対象をしぼり, *PChron* の First Continuation と Second Continuation で名詞の格融合がどの程度に発達しているか調査した。結論として次のことが指摘しうるのであろう。

(1) 母音連接を避けるために生じるとされる final-*e* の削除は *PChron* で

は明確には認められない。したがって、単数での無変化形は大部分音韻的に条件づけられたものでなく、対与格融合によって生じたものと考えられる。

- (2) 概して、単数の無変化形は First Continuation から Second Continuation にかけてかなりの増加傾向を示している。
- (3) 強変化中性名詞について、First Continuation では屈折形が多く（表 III）、Second Continuation では無変化形が屈折形よりもかなり増加している（表 VIII）。
- (4) 強変化男性名詞については、すでに First Continuation で無変化形が主要形であり、Second Continuation で屈折形は例外的な存在となる。
- (5) 名詞によっては屈折形だけが現れる—— *mynstre*, *-byri*。
- (6) 弱変化名詞(*n*-stem)が無変化形（子音屈折）をとる例はみられない。
- (7) *wif*(*n*)は屈折形だけが現れるが、これは慣用句に屈折形が残り易いの指摘と一致する(to *wife*)。
- (8) 複数形は Second Continuation ですべて対与格融合をこうむった形だけで、歴史的与格形は残っていない。
- (9) 類推による *s*-plural は強変化中性・女性名詞および弱変化名詞にも及んでいる。
- (10) 複数形での対与格融合について、*PChron* の状況は *Kentish of Aeynbite of Inwyrt* (1340) のそれと類似しているが、それよりも一段と近代英語に近づいている。以上のことは、単数についても言える。
- (11) *Trinity Homilies*, *Vices & Virtues*, *Lazamon's Brut* (O-text) では、単数よりも複数で対与格融合の発達が著しいが²⁴⁾、*PChron* および *Aeynbite of Inwyrt* でも同様の傾向が認められる（表 XI）。

(Table XI)

Forms Texts	Sg.			Pl.		
	N/A	D	?	N/A	D	?
First Continuation	124 (41.3%)	82 (27.3%)	94 (31.3%)	27 (84.4%)	1 (3.1%)	4 (12.5%)
Second Continuation	59 (54.1%)	17 (15.6%)	33 (30.3%)	14 (100%)	0	0

(12) *Lambeth Homilies* (Group B), *Lazamon's Brut* (C-text), および *The Owl & the Nightingale* では複数での発達が単数でよりも遅れ, また analogical plural が全くみられないことから, これらのテキストは対与格融合の初期の段階を示すものであろう。発達の中間段階で, 複数での融合形が単数でよりも多く現れるようになり, *PChron* の Continuations はその中間段階の後期を反映するテキストと考えられる。

注

- (1) The text used: *The Peterborough Chronicle 1070-1154*, ed. Cecily Clark, 2nd ed. (Oxford, 1970).
- (2) 岸田 (1996^a) 「*Ayenbite of Inwyrt* における前置詞格について」『学習院大学文学部研究年報』第 43 輯, pp. 43-63。
- (3) Joseph & Mary Wright, *An Elementary Middle English Grammar*, 2nd ed. (Oxford, 1928), § 141, pp. 71-2。
- (4) 岸田 (1994^b) 「*The Owl & the Nightingale* における無語尾と格について」『学習院大学言語共同研究所紀要』第 17 号, pp. 84-92。
- (5) 岸田 (1989) 「*Lazamon's Brut* における対与格融合」『学習院大学文学部研究年報』第 36 輯, pp. 77-97; 岸田 (1990) 「*Lazamon's Brut* の C²-Text における対与格融合について」『学習院大学文学部研究年報』第 37 輯, pp. 15-44。
- (6) J. A. Burrow & Thorlac Turville-Petre, *A Book of Middle English*, 1992 (Blackwell), pp. 73-4.
- (7) Cecily Clark, pp. lii-liv.
- (8) Cecily Clark, pp. lxix-lxx.
- (9) 岸田 (1994^a) 「初期中英語における三人称代名詞の対与格融合の発達段階について」

- 『学習院大学文学部研究年報』第 41 輯, pp. 53-91。
- (10) R. Lass, 'Phonology and Morphology', *The Cambridge History of the English Language*, Vol. , 1066-1476, pp. 79-80, (Cambridge) 1992.
- (11) Cecily Clark, P. lv.
- (12) Joseph Anglade, *Grammaire Elementaire de l' Ancien Francais*, Armand Colin, 1965, pp. 76-80.
- (13) OE でも固有名詞 (外来語) は時に無変化であった (cf. C. C. Eble, *Noun Inflection in Royal 7 C. XII, Ælfric's First Series of Catholic Homilies*, University Microfilms, 1971, pp. 72-3.)。
- (14) mid processionem (*1125/18, 1131/20) では Latin feminine noun *processio* のラテン語対格形が与格機能で用いられている。これは OE にもみられる用法である。上記の 2 例は対象外とする。
- (15) endingless locative とされる *-wic, dæg* は OE でもみられる (Cf. A. Campbell, *OEG* § 572; C. Sprockel, *The Language of the Parker Chronicle*, Vol. , (Hague) 1965, § 7.1.5., p. 157)。
- (16) OE *healf* の主格形は *healf*, 斜格形は *healfe* であり, ここでは *half* 形は対格形でなく主格形に由来する (887/13 on þa *healfe* muntas (acc.sg.f.))。
- (17) 複合語の固有名詞は第 2 要素が普通名詞の場合, 分類上その名詞の屈折類に属させた (例えば *-ford, -wic*)。
- (18) Cecily Clark, P. liv.
- (19) *The Parker Chronicle* では pluralis tantum として目的格に *Eastron* (OE. f. *n*-stem) が現れる (C. Sprockel, § 7.9.3, P. 179)。
- (20) 女性 *i*-stem 名詞 *færd/ferd* (OE *fierd* 'army') の無語尾と格形は OE の対格形でなく主格形の $\emptyset$ -ending が斜格に及んだことから生じたことになる (C. Clark, p. lv)。
- (21) *hærness* は MED (s.v. *harneis n.*) によれば単 / 複同形である。OF 起源の語である (*harnois/harnes*)。
- (22) Cecily Clark, p. liv.
- (23) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. C. Plummer & J. Earle, vol. , Glossary (s.v. *dæg*), p. 321.
- (24) 岸田 (1992) 「 初期中英語における三人称代名詞の対与格融合について 」『学習院大学文学部研究年報』第 39 輯, § 8.4., pp. 46-7。

(1997 年 8 月 20 日)

(英米文学科 教授)

The Peterborough Chronicle における前置詞格について（岸田）